

Case 01 名城大学理工学部建築学科 〔柳沢研究室〕

フィールドで得た体験と実感を大切に 木の家をつくり、町を歩き、人と会う



学生が設計・施工するリノベーション 味鏡（あじま）改修プロジェクト

名古屋市北区東味鏡の古い木造家屋をセカンドハウス兼地域サロンに改修する本プロジェクトは、柳沢准教授や大工の指導のもと、ゼミの学生が設計・施工に取り組む試みである。改修テーマのひとつに「建物に刻まれた時の重積を表現すること」があるが、これを象徴するのが天井板。削がした床板を再利用して天井に張ったものだが、いずれも異なる部屋の元床板である。数回にわたる増築を経てきた家だから、元床板の「年齢」も異なる。この天井の下にあった部屋のもの、和室の畳下の板、その畳の上に敷いたフローリング材……。タンスやカーペットの痕があり、材の種類も幅も色調も異なるスタイルが増築のプロセスを感じさせる。

名古屋市北区東味鏡（ひがしあじま）。つややかな緑の生垣に囲まれた敷地の一角に建つ瓦屋根の古い平屋に、去年7月、イキのいい若者たちが出入り入ったりしていた。しばらくして姿を見なくなったと思っていたら、今年の5月も末になってから日曜以外はほぼ毎朝のようにやって来て、その古い木造の平屋で日が暮れるまで働いている。大工さんには違いない、でもずいぶんとまあ若い人ばかりで女の子もいるけれど……。などと思っていた人もいるかもしれない。実際は挨拶があったから近くの住民はわかっていたが、この若い彼・彼女たちの正体は「名城大学の学生さん」、理工学部建築学科・柳沢究（きわむ）研究室のメンバーである。



大工見習い誕生す

3・4年生と大学院生の計26名が丸一となって取り組む「味鏡改修プロジェクト」。終戦前後に建てられたと思いき木造平屋をセカンドハウスとしてリノベーションする。この平屋は神道系の教会で、小さな御堂に住まいを数度にわたって増築したものだ。ここにひとりで暮らしていた母親が亡くなったのを機に改修し、郷省の折には寝泊まりして、ゆくゆくは地域に開いたサロンとして活用したい、とこの家の子供たちが、建築家でもある柳沢准教授に依頼したのが事の発端である。

2013年7月からメンバー総出で屋根裏ののぼったり床下に潜ったり、ホコリまみれになりながら家中の至るところを測り、写真に撮って、平面図・



柳沢 究 Kiwamu Yanagisawa

一級建築士、博士(工学)。1975年生まれ。1999年京都大学工学部建築学科卒業。2001年京都大学大学院工学研究科生活空間学専攻修士課程修了。2003年同大学院博士課程中退。2003年神戸芸術工科大学大学院助手。2008年一級建築士事務所建築研究室代表。2012年名城大学理工学部建築学科准教授。



林業プロジェクトの中心メンバーは菅沼昂志・岡田一輝・諸岡俊・徳森寛希・高田宙さんの5人。柳沢研のメンバーでシフトを組んで作業に当たっている。解体や施工をしながら改修の痕跡を見分けるのも大事な仕事のひとつ。この家が建てられた数中もしくは戦後の材料が乏しいなか、古材の使い回しをしてみたいこと、前面道路が拡張された時に家屋をその分割つたいにしたいことなど、この家の歴史が分ってきた。11月のある週末、施工が現場に長机を持ち込んで、心づくしの手料理とお酒で皆をもてなしてくれたという笑顔満載の報告がFacebookにアップされた。当初は秋の竣工を予定していたが、少し工事が遅れているようだ。この冊子が出る頃には完成しているかもしれない

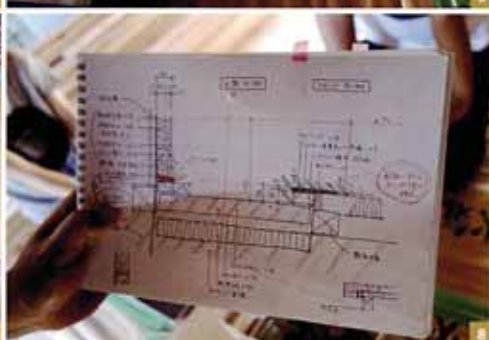


写真1=「学生が実際の現場で施工できるのはすごく貴重な体験だと思います。長期にわたって参加すると、工程が分るし勉強になります」(岡田一輝さん・4年)
 写真2=現場で学生の指導にあたる中村武司さんは祖父の代からの大工。2005年の「愛・地球博」で展示された「となりのトロ」の「サツキとメイの家」を建てた人でもある
 写真3=左から設計担当の徳森寛希さん、現場監督の菅沼昂志さん、模型製作担当の諸岡俊さん(全員4年生)。「施工があるのでひとりがデザインは許されません」(徳森さん)。「大工の中村さんに教わったことを前に伝えて情報を共有することの難しさを感じています」(菅沼さん)。「模型づくりは工事のよい予習になりました」(諸岡さん)
 写真4=山本晋太さん(左端・修士1年)。「週に1回くらい来ている。現場にいと、図面の数字はあてにならないということが分ります」
 写真5=諸岡さん製作の軸組模型
 写真6=本誌誌(5頁)に参加した際につくった名城大お揃いのTシャツを着た高田宙太郎さん(4年)。「白髪」という作業ズボンを買って贈っています。「紅葉」とか「葉集」というシリーズもあるんですけど、これが一番愛用ので」
 写真7=「ズミで少しずつ削っていきノコ穴をつくるのが好きです」(市村千尋さん・3年)
 写真8=徳森さんが描いた断面図

立面図・断面図・各部屋の展開図を描いてCADデータにし、軸組模型を完成させたら夏休みが終わっていた。その後2014年3月までは改修計画の立案・設計、そして5月末からようやく解体工事に入ったというわけだ。シフトを組んで、ゼミのある日と日曜を除く週5日、1日4～5人で作業している。9月末、取材のために現場を訪れると、この日は男子6人と女子が1人、蒸し暑いなかそれぞれの持ち場で汗を流していた。自分が何をすべきか明確にわかっている身のこなし。ヘルメット、作業ズボンに地下足袋姿もなかなかサマになっている。

ぜいたくな体験

このプロジェクトに柳沢研で取組むことに決め

たのは、予算の関係もあるにはあるが、それより何より学生に「勉強させてもらえる現場」を与えることができる、と准教授が考えたからだ。「色々な人に関わってもらって風通しのよい家になりたい」と、施工の快話も得た。とはいえ、道具もまともに使えない素人集団である。そこで学生の指導を頼ったのが、大工の中村武司さんだ。

中村さんは木造の伝統構法を得意とする工務店の代表であり、他の大学でも木造建築について教え、実際の現場で学生とともに施工し、ワークショップを開いて子供たちに家づくりを教えたりもしている。日本の大学では木造建築教育はほとんど行われず、ものづくりを学ぶ場もない、と案じる中村さんは、柳沢准教授の考えに大いに共感した。

中村さん自身、名城大学建築学科のOBである。大工だけで仕事するより大工だというのが、「みんな熱心だし、いっしょに現場をやるのは楽しいことです。こうして学生の立場で現場に関われるということは、本当はとてもしたいことなんです。今はそのことがわからなくても、まあいいか(笑)。あとでわかってくれれば」

改修工事のテーマは、古いものを活かし、「時間」を表現すること。増築を繰返し、何層もの時を積重ねてきたこの平屋の、継ぎ足されていったプロセスが感じられる改修をすることだ。工事が始まったばかりの頃はなすべきことがわからずその場で固まっていた学生も、テキパキ動いて掃除の仕方もうまくなり、腕も上がって大工見習いが板についてきた。

インドをフィールドに 集合住宅の提案と 「融合寺院」調査

柳沢准教授は学生時代、中国からボルトガルまで1年間のユーラシア大陸横断の旅に出ている。以後アジアを中心に広く都市や集落を調査してきたが、インドもそのフィールドのひとつ。准教授のインド研究に魅力を感じてゼミに入ったという学生もいる。ここでは2つのインドでの調査を紹介する



インド都市部における環境配慮型集合住宅の提案(2013年)＝ある企業からの委託で、数年前からインドの住宅について調査していた。半屋外の中庭を中心とした生活をするのがインドの伝統的な住宅であるが、この調査をもとに、都市部の集合住宅を提案した



「融合寺院」の調査(2013年～)＝2013年と2014年の夏、インドのヒンドゥー教の聖地・ヴァラナシで、3週間ほどかけて「融合寺院」の調査を行った。「融合寺院」とは、既存のヒンドゥー寺院の囲い込みを伴う住宅の増築現象をそう名づけたもので、融合寺院の存在の確認と融合形態を調査、住人へのヒアリングも行った。「いつから住んでいるのか」「何故このような場所に住もうと思ったのか」など、通訳を介して聞き取り、寺院や家族固有の歴史に触れた。現地の人からは、突然の訪問にも快く応じてくれたという

蒸し風呂のような夏の現場も無事乗り越えた。ある学生がいうことには、「長時間上を向いたまま天井板を張るのが大変でした。熱気がたまって上へ行くほど暑くなるので、汗がばたばた流れ落ちて、下にいるヤツが「雨降っとるみたいだが～」って」味鋳改修プロジェクトには柳沢研のエッセンスが詰まっている。どんな研究室なのか？

調査・分析・表現・発信のサイクル

柳沢准教授は、学生時代からユーラシア大陸横断の旅に出たり、インドを中心としたアジアの都市や集落の調査をして、日本を含めた世界の伝統的な建築や民家といったその土地固有の「バナキュラー」な建物に数多く触れてきた。そして建築家になって

からは、古い町家の改修や住宅の設計を手がけてきた。研究にしろ設計にしろ、建築と場所との関係、建築と地域性や生活文化との結びつき、そこに刻まれた時間の蓄積に注目して取り組んできた人である。

「うちの研究室のテーマは、実はカッチリ定まっていなんですよ」。柳沢准教授はいうが、方針だけは決めている。すなわち、フィールドワークで現場に出て得た体験と実感をもとに考え、その体験や実感を客観化して分析、さらにこれを第三者と共有できる形で表現し、社会に対して発信することだ。「その条件さえ合っていれば何でもいいんです、テーマは」。実際、Facebookや研究室のHPに活動報告や研究内容の概要を載せて頻繁に更新し、ほかにも1年間の活動記録を「名城大柳沢研

クロニクル」という会報にまとめるなど、常に外部に向けて発信している。これは、内輪のことなら低レベルであっても許されるが、外へ向かって公開するとすればそうはいかないからで、「研究の質」と「伝わる表現力」が自ずと高まっていくからなのである。

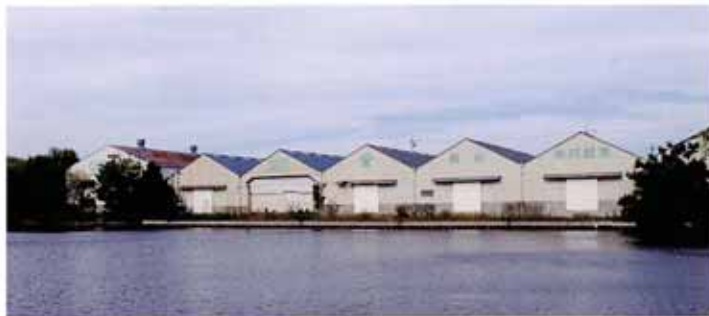
土地を、暮らしを、技術を考える

個々の学生が抱える研究テーマは6頁に譲るが、味鋳改修プロジェクト以外の研究活動についても一部を紹介しよう。味鋳と同様、木造建築教育の一環として今年初めて柳沢研の過半数のメンバーが参加したのが、「木匠(もくしょう)塾」である。岐阜県中津川市加子母(かしも)で夏休み中の約2週間、

フィールドワークで 地元名古屋の町に繰り出す

名城大学では3年生からゼミに配属されるが、卒業論文や卒業設計の練習として、地元名古屋の町のどこか1カ所を対象にしてフィールドワークを行う。文献調査、建物調査、ヒアリングなど、町の見方・考え方を学び、まとめや発表をすることによって研究活動の基本を身につける。

左・2014年のフィールドとなった中川運河
右・2013年のフィールド・大須商店街



木匠塾でものづくり 森と木と技術と村を知る

木匠塾は、木材の産地や林業の現場で、リアルに木材に触れながら木造建築を学ぶことを目的に始められたサマースクール。地元のために役立つ建物の施工だけでなく、春のうちから村内見学や林業体験を行い、施工に向けての設計はもろろん、行政や村長等へのプレゼンテーション、予算の管理、アフターメンテナンスまで行う。全国に木匠塾は9つ。柳沢研は2014年から岐阜県中津川市加子母(かしも)の木匠塾に参加している。他の6つの大学と2週間ほど合宿しながら、大工の指導のもとで施工を行った。ちなみに柳沢准教授も木匠塾のOB。ものづくりだけでなく、山の維持や自然のサイクルを知り、他大学の学生や村人と交流するのも貴重な体験だ。



7大学の学生が合宿しながら、自分たちで設計した木造建造物の施工や改修を行った。村人とも交流しつつ、地元の林業関係者や大工の指導のもと、倉庫を改修し、集会所・バーベキュー小屋を増築した。また、これとは別に、東北復興支援の「木興プロジェクト」にも柳沢研から5人が加わり、宮城県南三陸町田の浦の集会所の増築工事を行った。

調査研究では、インド・ヴァラナシの「融合寺院」がユニークだ。ヴァラナシはヒンドゥー教の聖地で、一度寺院が建つともう壊せない。よって土地を購入したら寺が建っていた、などというのはよくあることで、だから人々は寺院を残したまま住宅を「無理やり」につくる。あるものは寺院と住宅とが一体化し、またあるものは寺院をそのまま住

居として使いながら増築を重ねていく。こうした寺院の囲い込みを伴う増築現象を「融合寺院」と名づけ、場所の記憶を物理的に継承しながら都市空間を更新する有効なシステムとして位置づけた。スクラップ&ビルドならぬビルド&ビルドの魅力である。

柳沢研は地元名古屋の町にも繰り出す。市内で1カ所、調査の対象とする町や場所を決めてのフィールドワークだ。町を歩き回り、写真を撮ったり地域の人に話を聞いたりしながら町の現在と過去を記録していく。2013年は市の中心部にある大須商店街を調査。大須という町の魅力や問題点、今後の課題をあぶり出し、未来に向けての提案を行った。2014年の今年は、かつては名古屋地域に

おいて中心的な水上輸送路として活用された中川運河について、鋭意調査中である。

「建築学科ですから、学生にはやはり将来は設計をやってほしいと思っています」と柳沢准教授は語る。「使いやすい動線、機能性、カッコいい、美しい。こういうことも大切ですが、その土地がどんな場所で、町のなかで建物がどういう意味をもつか、生活というものをちゃんと見てつくってほしいんです。その人たちの暮らし方、価値観、生活習慣を考えてほしい。そして、大工、左官、塗装……、建築の技術のことを考えてほしい。柱を1本つくって立てるだけでも大変なんです。どうやってつくるのか？ このことを常に意識しながら設計できる人になってもらいたいですね」

私たち柳沢研は こんな研究をしています

3年生12人、4年生12人、大学院生2人。総勢26人の柳沢研のうち、忙しいなか時間をやりくりして集まってくれた8人に、卒業論文、修士論文、それぞれの研究テーマについて話してもらった。



前列左から徳森寛希・新井美加・清呂水雄介・菅沼昂志さん。後列左から井野健太郎・高田宙さん・柳沢究准教授・山本将太・阿田一輝さん。背景は、大学院進学、ハウスメーカー、工務店、公務員、リフォーム会社とさまざまな道

清呂水(みそろぎ)雄介さん(4年)「名古屋市中心部にある大須商店街(5頁)の駐車場を調査対象にしました。まず、大須に駐車場がどれだけあるかを調べたところ、全体の3割近くを駐車場が占めているということが分かりました。思っていた以上に多くて驚いています。この駐車場が大須の町に一体どのような影響を及ぼすのか、それがテーマです」

高田宙(ひろし)さん(4年)「愛知県奥三河の山間部にある東栄町で、家の敷地内に建てられた『屋敷墓』の調査をしました。日曜祝日を使って出かけて行って、屋敷墓を見つけてはその家の人に聞き取りをするんです。はい、空き家の屋敷墓についても調べました。合計8〜9軒くらいかな。『家』の継承の仕方、墓が『家』に与える影響を知りたいと思ったんです。動機ですか？ 故郷ってなんだろう、と思った時、死んだあとに帰る場所、それはどこか。そう考えたら、墓だな、と」

井野健太郎さん(4年)「避難所がテーマです。仮設住宅ではなくて、体育館などの避難所です。東北復興支援のための『木典プロジェクト』を通じて南三陸の方々と関わって色々感じるところがあり、被災地から学べることはないかと考えました。生活の場としてつくられたわけではない体育館での暮らしが一番苦しいのではないかと、果たして避難所として正しいものなのか、という思いで、仮設住宅に移った方々に避難所での暮らしについてヒアリングしました。前を向いて生きようとしている人の中には、『昔のことを言われても』という方

もあって、思うように調査が進まないこともありましたが、避難所のまとめ役だった方にも話がかがいが、どうにか調査し終えることができました」
岡田一輝さん(4年)「名古屋市内を流れる中川運河(5頁)沿いの倉庫の形態パターンを調査しました。産業と人と建築の結びつきに興味があります。今はトラック輸送が中心で、僕が生まれた頃にはとくに水上輸送は盛れて、中川運河の水面は使われなくなっていました。運河に面してつくられた大きな開口の数は、倉庫が建てられた年代によって変わります。倉庫のよさを見直し、産業遺産としてどう保存するかを考えています」

徳森寛希さん(4年)「名古屋市内に鉄道貨物の分断された高架が残っているところがあるんですが、これは1970年代に建設されていた貨物線の工事が途中で中止された名残りなんです。当時、既に鉄道貨物は廃れていて、近隣住民の反対もあったためで、300億かけてつくり、300億かけて壊した、といわれたそうです。その壊しきれずに残った高架の下が、いまブラジル人学校やソーラーパネル設置場など、いろんな形で利用されているんです。ここにヒアリング調査をかけて、壊すだけで莫大な金がかかるから、と放置されるしかなかったインフラの問題を社会問題として取り上げました」

菅沼昂志さん(4年)「僕が現場監督をしている味鋳改修プロジェクト(2〜3頁)について、活動記録や記憶をもとに、学生が設計・施工をするこ

との利点や問題点を洗い出して今後に活かす、というのが研究のメインテーマです。サブテーマは、解体や施工の過程で見つけた改修の履歴から、味鋳のあの家のもとの姿を模型などで復原することです。改修って面白いですね。難しいぶん、やりがいがあります」

新井美加さん(4年)「妹島和世さんが設計した岐阜県原野団地『ハイタウン北方・妹島棟』の住み方調査をしました。nLDKという形式とは違ったプランで設計された団地の住人の方々に部屋を見せてもらい、平面図を起こして実際の住み方と設計意図との一致点・不一致点を調べ、書き込んでいきました。nLDKの何が悪いの？ と思ったのが研究のきっかけです。何故そんなことを思ったかという点、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』という本の中にあった上野千鶴子さんと山本理顕さんの対談を読んだからです。はい、調査を終えた今、やっぱり私はnLDKでいいと思っています」

山本将太さん(修士1年)「インドの『融合寺院』(4頁)の空間構成の変容過程を住人にヒアリングし、家の中に入れてもらって増築や改修の痕跡を観察してまとめ、図面化しました。ヴァラナシの町はガンジス河沿いにあるヒन्दゥー教の一大聖地で、インド最古の町です。寺院が壊せずに残っているから、町は長い時間変かたちを変えないでいます。人々の暮らしをずっと残し続けているところに魅力を感じます」